

第6回こどもの創造的学びに関する研究会（令和元年7月9日開催） 議事要旨

1. 開会・座長挨拶

- ・企画調整局長より挨拶

2. 各委員の自己紹介

- ・各委員より自己紹介

3. 昨年度研究会の振り返り、今後の進め方・スケジュール（事務局より資料④に基づき説明）

- ・キーワードとして、総じて（委員共通で）「ワクワク」する機会・体験できる場にする（大人もワクワクする）ことが大事。
- ・主な検討事項として、この創造的学びのプロジェクトは何をGOALとするのか。世の中を変えたいと思う子供が出てくると、子供たちが社会とつながり、社会を変えるというモチベーションを持つことと捉える意義もある。今年度を通じてGOAL設定を模索したい。
- ・スケジュールとして、今年度はまずTOPGUNチームとEVERYONEチームに分かれて、既存プログラムの調査分析、実験プログラムの企画検討を並行して委員間で行い、それらを踏まえて全体会で方向性の確認、情報発信（WEBサイトの構築等）を進めたい。そして実験プログラムの実施・検証を行う。VIVISTOPの有用性を踏まえ常設も視野に入れて検討していきたい。

4. ディスカッション

- ・VIVITAの取り組み、昨年度の実験的プログラムの実施状況について委員より紹介
- ・「未来の教室」ビジョン 経済産業省「未来の教室」とEdtech研究会 第2次提言（資料⑩）について委員より紹介
- ・研究会の方向性、実験的プログラムの内容についてディスカッション（以下、主な意見）

○実験的プログラムの量の観点

- ・（委員）予算があれば、事前アンケートで出てきたものを全部へ併走させて、その中で成功したものを拾うという考え方もある。
- ・（委員）量を多くうつことが大事。昨年度は初年度ということもあったが、子ども達を巻き込めるプログラムが少なかったという印象。評価という点からも、量があった方が分析もしやすいし、広がりもある。12月に限らず、できるものをできるタイミングでやっていくのがいいと思う。

○実験的プログラムの質の観点

- ・（委員）キーワードとして出ている内容は大事だと思うが、検証は行なわないのか。どれがこどもの成長に効果があるのか特定していかないと、いいことだけやって終わりになる。
（事務局）昨年度も評価の観点、効果検証、大人のガイドラインという議論はあったが、なかなか難しくできなかった。プログラムについての検証は絶対必要。昨年度VIVITAに参加された子どもについて、本人・保護者の意識、行動の変化等を追跡する、現状民間のプログラムを色々ヒアリングしているが、そこでの定性・定量の評価尺度を取り入れる等の方法を検討したい。
- ・（委員）VIVITAは形状変化だが、マテリアルカルタはモノの履歴の変化について学ぶプログラム。廃材を集めて工作するだけではクリエイティブではない。そのものから何を推し量るかが大事。
- ・（委員）クリエイティブとは何なのかというのをもっと議論することが必要。本物をぶつけて枠を広げるということは大人の方にも必要。

○実験的プログラムの仕組み・その他の観点

- ・（委員）12月の実験的プログラムは今あるものをやるのか、研究会で検討してつくるのか。
（事務局）VIVITAの活用は是非やりたい。その他のプログラムは、TOPGUN/EVERYONEの部会で既存のプログラム等を検証しながら、それぞれにどんなことができるのか検討の上で実施したい。
- ・（委員）小学生から見たら、大人はかけ離れている。ロールモデルとなる、高校生や大学生など、自分より少し上の方から学ぶと創造性を身近に感じることができるのではないか。
（事務局）運営していく上では大学生のボランティアスタッフ等で運営できる等、人を育てる必要がある。
（委員）ロールモデルとして一番強いのは自分と同じ年代。量を作るときのマネジメントにおいて重要なのはリソース・予算。いいプロジェクトがたくさんあるが、どういう風にグルーピングしていくかが重要。新規性・実効性・皆がやりたいかどうか。このあたりで整理してみると見え方が変わるかもしれない。
- ・（委員）小学校の一斉型の授業を受けるとシュリンクしてしまう部分があることが残念。先生がどうこうというより、学校教育のシステムを変えていかないと抜本的には変わらない。先進的な神戸モデルで学校の教育を大きく変えていくようなものでないと厳しい。教育委員会と連携しながら、どこまでできるか。

○研究会全体について

- ・（委員）実験的プログラムをやる中で気質・気風みたいなものが生まれてくれば財産となる。こどもが出すアイデアを「これはすごい」と本気で評価できる機運ができれば勝ち。神戸の進取の気風ということと、本研究会は合わせていける話だと思う。すごい夢のある話である。
- ・（委員）2025年に実現したいこと、その道筋を皆で共有できることが大事であり、そんな研究会にしたい。学校を巻き込んでやるには相当パワーがかかる。現場の先生方がいかに興味を持ってくれるかが重要。また、どんなこども像が将来必要なのかについて研究会として確認するべきではないか。「自分でつきつめる」、「答えの出し方ではなく、問の立て方を知っている」、「知らないこととの付き合い方を知っている」こども等、受身ではない状態のこどもを目指す。TOPGUN、EVERYONEにおいても、その点を共有してからスタートすべき。
- ・（委員）10～20年後を見据えると、人と違うことをしている人が増えていくことが大事。

○今後の進め方（事務局より）

- ・次回以降 TOPGUN、EVERYONE の部会に分かれて議論。後日、どちらの部会に参画するかアンケートを行なう。

5. 閉会

- ・企画調整局長より挨拶